

志社という域を超えて、今後編纂さるべき教会史のモデルとしての座を占める教会史の一つと言っべきであらう。しかして、それは一教会史にとどまらず、日本の近現代史における「地方」の歩みをたどることに貴重な里程の一つとなるであらう。

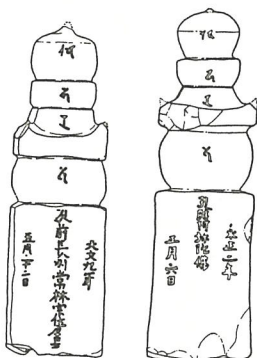
第一章胎動期における池袋清風日記の駆使、西第第一、第二、第三公会の名簿の丹念な分析、第二章誕生期における四条教会仮日記、会員戸籍を使った叙述、第三章形成期、第四章伸展期、第五章成育期に見られる豊富な襲蔵資料の紹介、第六章の戦時下の苦難期、第七章再生期、第八章内実期の克明な筆致で綴る教会の足どりは、各章に設けられた「同労の人びと」の叙述とともに、この教会の躍如としてあたたかな教会像とこの教会にかかわる人間群像をわれわれに示してくれる。

杉井六郎（大学人文科学研究所教授）

同志社校地出土の埋蔵文化蔵(8)

鈴木 重治

一石五輪塔 いつせきごりんとう



室町時代後期 高さ・58cm (左)

一九七五年十月 同志社大学光塩館地点出土

同志社の今出川校地が、江戸時代に公家屋敷であったことは、すでによく知られている。それでは、公家屋敷以前は何があったのか。

宮内庁書陵部蔵の寛永十四年（一六三七）の「洛中絵図」をみると、御国母様下屋敷、つまり東福門院の屋敷が、現在の女子部の全域と、大学の法経研究室や人文研などのある光塩館、啓明館あたりを占めて

いて、その西北の地域に「報土寺」という寺が記されている。アーモスト館やゲストハウスあたりに相当する。

発掘調査によると、女子大学の図書館や大学の光塩館の地点では、墓地にかかわる遺物が出土している。ここに示した一石五輪塔もその一つである。

光塩館地点だけでも、碑名のおきらかな一石五輪塔が13基検出されていて、それらの年号をみると、永正二年（一五〇五）から天正十一年（一五八三）にわたるものであって、天文年間（一五三二～一五五四）の紀年銘資料がとも多い。つまり、16世紀の墓碑群である。

図示した2例を含めて、ほとんどの表面が火を受けて荒れているが、扁平な風輪、火輪の四隅の立ちあがり、さらに長く延びた地輪の形態などに特徴があって、五輪塔の様式を確認する上で好資料となっている。

なお、今出川校地内で墓地に関する遺構が検出されているのは、女子大学の楽真館前、大学の明徳館西北地点、大学図書館西南地点などである。

ちなみに、墓地の跡に住む集団は、必ず繁栄するという伝承を信じている人も多い。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）